
相違フィジカル

ていか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相違デジタル

【コード】

N8962Z

【作者名】

ていか

【あらすじ】

見つめてたその理由。

目でじつとその姿を追いかける。窓際、真ん中の席。ちょうど校庭が見える一番好きな席。先生は漢文を読んでいるけど、私は読めないし、聞いても意味がわからない。だから、この時間はずっと校庭を見る。先生は教科書と黒板に夢中で私のことなんて見てない。

突然授業終了のチャイムがなった。ノートに写し切れていなかったことを思い出し、急いで板書を写す。チャイムが鳴り終わる前に、日直の起立という言葉が教室に響いた。生徒が席から立ちだし、黒板はもう見えない。礼が終わり、私は席について、立ち歩いている人と人の隙間でなんとか黒板をみながら写し続ける。

「秋乃ちゃん！」

「あ、真結」

「まだ書き終わってないの？」

「うん。ちよつと待ってて。ごめんね」

苦笑いをこぼすと、真結は、仕方ないといった顔で、早くしてね、といった。

「秋乃ちゃんはいつも何をみてるの？この時間だけ遅いよね。板書写すの」

「え？」

「あー！もしかして好きな先輩とか？この時間って確か三年の体育の授業だったよね？」

「いや、好きな先輩とかそういうんじゃないんだけど…。そう、三年生」

「はつきりしないなあ。まあ、いいや。早くご飯食べに行こうよ！」

「あ、うん」

ちよつと写し終わったノートを閉じ、席を立った。

真結と一緒に廊下に出て、食堂へ向かっている途中、先輩とすれ違った。

そこで初めて、先輩と目が合った。

放課後になり、見飽きた景色の中を歩く。今頃真結はテニスの試合に向けて頑張っている頃だろう。帰宅部の私は帰る以外選択肢を持っていなかった。この辺は建物が多くて、季節で色を変える紅葉樹だとか、そういうものはほとんどない。つまらない通学路だと何度思ったことが。5分程度の道のりにそんな並木道なんて期待はしていないけれど。

一軒家の前について、門をくぐりながら家の鍵を探した。ちらりと視線の中隣の家が写る。表札のない家に興味はない。靴をごそごそとあさり、やっと鍵を見つけた。もうちよつとわかるとところにしまっておくべきだ、と思いながら、扉を開けた。

あの日から、一ヶ月ほどたったある日だ。なぜか先輩に呼び出された。

私がいつも見ていた先輩。委員会は同じだったものの、ほとんど話したことは無かった。数回、目があったことがあるくらいだ。私は彼の名前を憶えていない。

放課後の校舎裏という告白には定番の場所に私はいて、彼も私の目の前にいた。

「えっと」

その言葉から間を空けて、好きなんだ、と言われた。そして、付き合って欲しい、と言われた。なんで、そういう言葉が彼の口から出てくるのかと問いかけたかった。私は別に先輩のことが好きでも、付き合いたいわけでもないのだ。全然違う。だから、泣きたくなっ

た。

「ごめんなさい」

それしか言えなかった。それ以外に言えることがなかったし、見つからなかったのだ。

「なんでだ？だって、お前はいつも俺のこと見てたじゃん。目だつて何回もあつたし、これは自意識過剰でもないんでもない、事実だろ？」

そう、私はいつも彼のことを見てた。眉間にしわを寄せて、困った顔をしている先輩が視界に入る。気づいていたのか……。そんなに見ていたとは思っていなかったけれど。

「ごめんなさい」

それしか言えなかった。だって、私は彼が好きじゃないから。名前も覚えてない人を好きだなんて、そんな馬鹿な乙女はいないでしょう？彼の顔が見れなくなつて、下を向いた。もう、立ち去ろう。それ以外の行為は私には出来ない。もう一度、ごめんなさい、と言って、かかとを翻し、その場を去ろうとした。彼に背を向けて歩き出すと、すぐに手を引っ張られた。視界が回転し、衝撃を感じた。抱きしめられている。思ったよりもしっかりとしている体と背中に戻されている腕に挟まれていた。もう、泣きたくてたまらなくなつた。違うのだ。瞬間、彼のおいを感ずる。ほら、これも違う。彼の体を両手で押し、腕をほどこき、走つて逃げた。申し訳ないと思つたけど、それしかできなかつた。声なんて出せないし、目が熱かつた。ここで泣いたら恥ずかしいと思つていながらも、止まらなかつた。

もう遠い昔のことだ。隣に住んでいたお兄ちゃんが、私を抱きしめてくれたのは。

(後書き)

友達に頼まれたもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962z/>

相違フィジカル

2011年12月28日03時48分発行